ゆめうらら
～裏さんのお米・地域への愛～

裏　貴大

聞き手・針　沙采　村上　かりん（石川県立志賀高等学校２年）

稲を刈っているところ

プロフィール

私は志賀町仏木で農業経営している裏貴大です。昭和61年10月11日生まれの30歳です。現在、父、母、祖父母、嫁、娘、息子の８人で暮らしています。地元の小中学校を卒業後、七尾高校から神奈川大学へ進学し、その後地元へUターンしました。

自分の子供時代って言っても自分じゃわからないんですけど、中学校卒業するくらいまではガキ大将という感じでしたね。休みの日はテレビゲームとかは一切せずに小中学校の友達と外で遊ぶことのほうが多かったですね。特に何して遊んだか記憶はないですけど外で遊ぶことのほうが圧倒的に多かったですね。

その頃の将来の夢は祖父が大工だったので大工さんになりたいなって思ってたんですけど中学から大学まで野球やってるうちにプロ野球選手を一時期目指しました。でも最終的に学校の先生になりたかったですね。

生活環境にはすごく恵まれているんじゃないかなと思います。

農業との出会い

大学卒業してすぐに就農したわけじゃなくて３年間サラリーマンをやってたんだけど、全然面白くなかった。職種が半分公務員みたいな感じだったんですね。そしたら、どんだけ頑張っても何にも跳ね返ってこない。逆に言うと、頑張ってやってもやらなくても一緒っていう感じ。毎年同じことの繰り返し。そういうフラストレーションが３年間ずっと溜まり続けたっていう感じかな。だから事務所に座っているより、現場に行くほうがすごく楽しくて。机の上に座っているの苦手だなぁって。

それから私生活の中で社長と出会ったときに、社長ってすげーな、社長って呼ばれるの羨ましいなとか思ったりした。あと、自分が人に使われるのが嫌だった。自分で動きたいっていう気持ちがあったね。その時に「お米作りを」とはならなかっ

たけど、独立したいっていう気持ちはあった。

そんな中、自分の気持ちが大きく変わったのが東日本大震災でした。今、携帯なくなりました、車がなくなりました、ってなっても別に大したことないんですよね。でも食べるものなくなったら一番大変って思った。そう思った時に、たまたま家でお米を作っていたのでそれをきっかけにお米を作り始めた、っていう感じですね。

家族の声

家族は最初は大反対で、サラリーマンしてた頃に独立したいっていったらまず、祖父母が大反対して田んぼは儲からないって言ったんだ。父親も言葉には出してないけどやめとけというような感じで、唯一、後押ししてくれたのが母親だった。家族に、実際のところ食べるものもなくなったらどうすんのって話しても、やっぱりモノに溢れてる時代だからピンとこない。スーパー行けば買えるよっていう感覚。「日本じゃなく世界的な視野で見たら、食料危機っていうのはすでに起こっている」って説得して、初めて「しっかり経営として成り立つような田んぼにする」っていう条件のもとでならいいよって言われました。

お米になる稲

地域愛

地域が生き残ることを考えたらそれはとても大変。

「もう人減ってくね、うちらの地域終わりだよね」じゃなくて、次の手を考えないといけない。俺は会社経営をしているのとは別に地域の青年団というのにも所属しているから、まず青年団の地域行事に積極的に参加する。その次は、いろんなところに顔を出してコミュニティをつなぐ。志賀町といったらそれは「祭り」なんやよね。地域が大変っていうのはみんな一緒やと思うから、例えば祭りやイベントでお手伝いしながら、お互いの地域に行き来すれば人口が増えなくてもカバーはできる。外から人を入れなくても、地域内で助け合えることをしていきたいなと思ってる。

能登の自然について、自然ってのはいいものなんやけど、農地だったところが山に飲み込まれつつある。農地は農地としてしっかり守ってかないとなって思っとるね。環境は素晴らしいところなんやけど、イノシシが出てきたり、クマが出てきたり、そのことはやっぱり人間が招いた責任。だから農家単独じゃなくて、例えば農家と林業の人と手を組んで山の手入れをしたりとか、そういったことをしていきたいと思っとる。

米紹介

栽培しているのは、コシヒカリ、そしてゆめみづほ、今年は石川県の新品種、石川65号っていうお米。まだ名前が決まっていないお米やね。それと、おもちになるお米のカグラモチと、日本酒になるお米で五百万石と山田錦っていうのを作っています。粒の大きさが違うのとお酒になるお米っていうのは、お米の粒の中に心白（しんぱく）って呼ばれる白い部分があります。

一年間のサイクル

１月２月っていうのは作付計画を立てたり色んな申請書や書類整理をやってます。その他、営業と並行して地主さんとか離農する方々のところに、声がかかれば行ってますね。

２月の後半からは種もみの準備をして３月の上旬から畦塗りっていう作業をします。それから、トラクターで田んぼを起こしたり、苗づくりを進めて５月に田植えをします。田植えが終わったら、そこから６月から８月の後半くらいまではもう永遠に草刈りというか田んぼの管理ですよね。田んぼに入水したり落水させたり。そして刈り取りが始まったら刈り取りと出荷作業を並行してずっとやってる。それが終わるのが 10 月の後半かな。そこから 11 月から 12 月にかけて基本は東京へ営業にまわります。一年のサイクルはこんな感じかな。

水田に使う水は米町（こんまち）川から引いてるとこもあれば、大世（おおぜ）町っていうため池から引いてるとこもある。用水路の使用

耕作放棄地を整備し、大学生と共に酒米づくりに励む

は、大体９月半ばぐらいまで。シーズン中は用水路を使うけど、そこから来年の春まで何にもしなかったら草も生えるし、雨水とか流れた泥も溜まるしっていうこともあるから、シーズン前に地域の人達で用水路の掃除をするんだよ。

裏さん流

お米を作るときは、人間が食べるお米、人間が生きれるためだけの環境でお米を作ってても自然には勝てない。だから、自然に生きている色んな生き物達もしっかり生きていける環境を作っていくことを心がけている。

美味しいって感じるのは人それぞれ。同じもの食べても美味しいっていう人がいればあんまりっていう人もいるから、美味しいお米にこだわるっていうよりも、お米を通してもっと地域を活性化させるというか、この仏木にしても、土田（つちだ）にしても、志賀町にしてもそう。「全体がいいところだな」ってその地域全体の付加価値を上げることの方が大事だというので、「うちのお米おいしいよ！」っていう感覚はあんまりない。

営業するときも「うちの米食べてくださいよ」っていう感じではない。営業してて感じるのは特に東京にはいろんな業種の人がいて、例えば農業とは全く関係ないアパレル業界の方やお笑い芸人さんとかと会って、「そういえばあの人お米欲しがってたよ」っていうのを紹介してもらう営業の仕方を俺はしとるかね。いきなりお米を持って行って食べてくだ

さいっていうことは絶対しない。俺の営業の仕方っていうのは、異業種であっても自分のやりたいことや夢、志とかを話しながら営業の輪を広げていっとる感じかな。

■Nプロジェクト

能登、農業、日本酒の頭文字をとってN。就農して１年目のころ、起業する条件が「経営が成り立つこと」っていうのが頭にあったので、基本はやっぱり商品を売ること。まずは商売人にならなければいけないって思ってた。それがなかなか難しい。就農して１年が過ぎるころ収穫が終わって、11 月に奥能登の数馬（かずま）酒造の数馬嘉一郎社長と再会したんだよね。実は彼は高校の同級生なんだよ。その時に「俺こうゆう風にして農業やってんだよ」ってとことん喋ったけど彼が返した言葉が、「おい、裏、これから能登どうする？」って言ったんだ。俺は頭の中が「？」ってなっちゃったんだよね。彼は会社や従業員のことだけじゃなくて能登全体を視野に入れて経営してたんだ。それから「これからこの日本酒、農業それぞれの分野で能登を引っ張っていこうぜ」って言われて、気持ちが変わったんだよね。その後に「農業者から見た能登には何がある」って聞かれて、「耕作放棄地がいっぱいあるよ」と答えた。すると彼に「耕作放棄地で酒米作ってよ」って思いもよらないこと言われて驚いたのを覚えてる。その酒米で日本酒作るからその酒が売れれば売れるほど耕作放棄地がなくなっていくシステムを作っていこうって話になったんだ。

日本酒業界も問題抱えてて、日本酒の消費量が右肩下がりになってきた。それはなんでだろうって思ったら、若者が飲まなくなってるんだって。「じゃあ、その子たちは農業、日本酒ってどう思ってるんだろうね」ってなったときに「それなら大学生をこのプロジェクトに入れよう」ってなった。味を決めること、ラベルを作ること、もちろん農作業も全部学生に任せてスタートした。実はこのプロジェクトの名付け親も学生なんだよね。学生は金沢大学をはじめ県内のほぼ全

（左）収穫した酒米・五百万石を手にする数馬酒造の数馬社長と裏さん
（下）Ｎプロジェクトで、酒米を仕込む学生

大学生たちのアイデアで作られたＮプロジェクトポスター

Ｎプロジェクトで出来た日本酒
第一弾『Chikuha N』（右）と第二弾『Chikuha N 火入れ』（左）

ての大学から参加してる。

未来への一歩

最終的な目標ではあるんですけど、耕作放棄地をゼロにしたい。会社の作業的な面でいうともっと効率よく現場がまわるような仕組みを作っていきたいなと思っています。

自分の子供にはまずやりたいことを見つけてほしい。その中で、「お父さんのやっていることがやりたい」って言われることが一番嬉しいなって思うよね。

経営者としては、これまでに、こうならなきゃいいんだなって失敗した人の話をたくさん聞いた。もちろん成功した人の意見も聞くけど、ポジティブな人と話するのが一番大事かなって思うし、独立したいなら、その気持ちの軸がぶれなかったら誰だって出来る。なりたい自分の像が 10 年後、20 年後じゃなくて、50 年後、100 年後、自分の子供、孫ぐらいの世代まで予想できたら最高やね。

一日青年団という取り組み

仏木の青年団は何かあるごとに集まって酒を飲みながら語り合ってる仲間。今、「一日青年団」といって、移住を考えている地域外の人を対象に、青年団の活動に参加してもらい交流を図ろうという取り組みを企画しています。青年団の一年間の活動スケジュールって大体決まっとるし、大体月一で行事があるから年間 12 回、その中で一度青年団活動に参加してみませんかって募集してる。それがうまくいけば次にプチ移住ができるんやよね。これまで都会から地方に移住した人って全国でたくさんおるんやけど、その約 90%が失敗してるんやよね。人に馴染めないんだよ。都会の人がっていうよりか移住先の人が。そういうのが都会の人からしたらすごいカルチャーショックねん。こんなはずじゃなかったのにって。だからこの取り組みは地域になじんでから移住できるんじゃないかっていう意味ではやる価値はあると思ってる。

募集の年齢制限は特にないかな。青年団の定年は 38 歳やけど、移住を考えている人をターゲットにしとるからそこの年齢制限は設けてないんやけど、そういうのを考えている人は大体 30 代なんやわ。あくまでもデータでね。まあまだ成功してないんやよ。これからやっていきたいなぁって。

青年団活動やから男性の参加が多そうだけど、仏木青年団は団員の奥さん達と交流ができるようになっとるから、全然問題なく女の人でも地域になじむって意味では可能かなって思っとる。いろんなことをやろう！ってなったときに男達だけの考えやったら限界があるんやよね。だから仏木青年団は、女性の意見を入れようってことで奥さん達にも入っ

てもらっている。例えば祭りの打ち上げをしますってなった時も、奥さん達や子供達も入ってもらう。そうすると女性の意見は男の意見とはまた違った視点で物事を見とるし、第三者的に祭りを見てすごく冷静な意見をくれる。なぜ子供を入れるかって言ったら、将来俺らがいるような青年団に入りたいって思ってもらえるような組織になるためにも、子供の頃から参加してもらって交流を深めてる。

若者に向けて

いち農業者から見た高校生に期待することって言ったら、一次産業の人の見る目を変えてほしいってことかな。例えば毎日届く、食卓に並ぶお魚は誰が獲っているのかっていったら漁師たちやから、その人たちがいなかったら食卓に魚は並ばんわけね。それとか一次産業じゃないけど、土建業者の人達もそう。道路が壊れました、土砂災害がありました、復旧してくれるのは誰かっていうと役場の人とかじゃなくてその業者の人達やん。だから誰もがそういう目で見てるとは限らんけど、いわゆる３Ｋの仕事って感じの視点を変えてほしいって思うね。

［取材日：平成 28 年８月２日・９月 24 日］

PROFILE

裏　貴大 うら　たかひろ

昭和 61 年 10 月 11 日・30 歳
稲作農家、株式会社ゆめうらら代表取締役

大学卒業後、サラリーマン生活３年目の時に起きた東日本大震災をきっかけに、家がお米作りをしていたこともあったので、お米作りへの道に進んだ。能登や自然への愛は強く、環境を大事にして、「能登の里山里海の環境に地元農家が誇りを持つきっかけになれば」との思いで米作りをしている。無農薬・有機で作ったお米で酒造りを行うなど、地域の活性化にも積極的に取り組んでいる。

● 取材を終えての感想 ●

私は初めて聞き書きに参加しました。自分たちで名人のところに取材へ行って、書き起こしをして、レポートにまとめることがこんなに大変なことだとは思いませんでした。でも、聞き書きのおかげで、文章を考えたりすることが苦手だった私でもまとめる力がついたと思います。

お米についての知識は全然無かったけど、裏さんの話を聞いて、お米にもいろんな種類があることを知りました。私が毎日食べているお米はコシヒカリだけど、食べるものによってお米を変えてみるのも面白そうなので、試してみたいです。聞き書きを通していろんな人にお米のありがたさや美味しさを知ってほしいです。

（針 沙采　写真：左）

聞き書きに参加して昨年の作品集を見たとき、自分にできるのか正直不安でいっぱいでした。でも名人の裏さんのお話を聞いて、当たり前すぎて見えていなかったことを改めて感じることができました。当たり前のように毎日食べているお米や野菜の食べ物、他にも道路の整備など、たくさんの人たちに支えられて日々生活を送れているのだと感じました。そしてこのことを知ったとき、もっとたくさんの人に伝えたいと思いました。この完成した冊子を通して裏さんの思いや、いろんな人たちに支えられていることが伝わればうれしいです。

聞き書きをして大変なこともいっぱいあったけど、その分学ぶことも多くてとてもいい経験ができました。

（村上 かりん　写真：右）